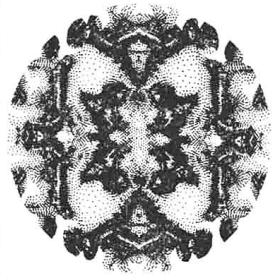
新鋭作家叢書

小田実集

アメリカ

河出書房新社



新鋭作家叢書——小田実集 ©1972

初版印刷——昭和四七年三月二五日　初版発行——昭和四七年三月三〇日

定価——七八〇円　装本——杉浦康平＋中垣信夫＋海保透　Carpenter Center for the Visual Arts : Cambridge による

発行者——中島隆之　発行所——株式会社河出書房新社　東京都千代田区神田小川町三—六　電話東京三九二—三七二一(代)　振替東京一〇〇二

本文印刷——暁印刷株式会社　製本——中西製本印刷株式会社

乱丁・落丁本はおとりかえいたします　0393-534104-0961

アメリカ……5

小説『セカンド・アベニュー』……336

小田実の発展**竹内泰宏**……346

年譜……358

新鋭作家叢書——小田実集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

アメリカ

いに、また淫猥になめた。
これが、その人物が《人間・このまるはだかなるもの》なのか。
そして、チャーレスはこう言いたいのだろう。その彼があなた自身である、と。十メートルの距離をへだてて「絵」を見ているあなたが自分自身を、「絵」のなかに、「絵」の不安のなかに、その一部となってすでにあまりにも入り込みすぎている自分自身を見いだすのだ、と。
そうかも知れない。私は、彼がそう言ったとき、ザラザラしたコンクリートの感触を実際肌に感じた。私はたしかに私自身の姿を円柱群のまえに認めたのであるが、同時に、アメリカの青年によくあるように、すでに頭髪が薄くなり、ロイド眼鏡をかけた、ズングリした体つきのチャーレスの姿をも明瞭にそこに認めた。——
とは言っても、私はその「絵」の実物を見たわけではなかった。写真もなかった。
「写真なんか……」彼は鼻でわらった。「フィルムがあったら、そのとき、おれはフィルムだって食ったね。」
彼のパリでの貧乏ぐらしの目撃者ボッブ・バージェが、いつか言ったことがある。
「パリでのこいつときたら、まったく《人間・このまるはだかなるもの》だったよ。こいつほど、そのことばにぴったりするのは、そのとき、まあ、いなかったね。作品より

作者が泣かせたねえ。ケチで高名なおれまで、なけなしの千フラン札を作者先生に呈上したんだからな。」
「ところで、その知られざる傑作はどうなったんだ。」
私が口をさしはさんだ。チャーレスは肩をすくめた。ボッブは妙な顔をした。
「消えたよ、きれいさっぱり。この地上から消失したよ。あとかたもない。」
いやにサバサバした口調で、チャーレスが言った。
金のないチャーレスには、パリでアトリエを借りる余裕はなかった。ある日、郊外を散歩しているときに、かっこうな倉庫を見つけた。その一部を格安に借り受け、彼はそれをアトリエにした。円柱芸術を始めたのも、そこでだった。《人間・このまるはだかなるもの》がやっと完成したとき、立ち退き命令が来た。彼は倉庫の借り賃をずっと滞らせていたのである。彼には家賃を払う金も、円柱芸術を移動させる金も、そのどちらもなかった。いさぎよく、彼は愛児をたたきこわした。
「まあ、自分の手でやったから、思いきりはよかったな。やっぱり、惜しかったけどね。」チャーレスは、一瞬、だまった。しかし、すぐつづけた。「だがね、負け惜しみじゃないが、あれはあれでよかったと思うね。」
何故なら、彼の表現を借りれば、「絵」は消え去ったあとでも作者の想像力のなかに確固として存在し、確固とし

1

チャーレス――チャーレス・ハーバート・ローガンは画家だった。どの程度の絵描きなのか、私は知らない。二十九歳。代表作は、彼自身のことばによれば、《人間・このまるはだかなるもの》

彼はそれをパリで描いた。いや、「描いた」などと言っていいかどうか。

三メートル四方ほどの壁画に、直径、長短さまざまのコンクリート製の円柱が、円型の切り口をこちらに見せて、一面にびっしり植え込んである。円柱の配列には、秩序・法則・脈絡、そういった七面倒くさいものは何もなかった。すくなくとも、作者以外の人間には、きわめて無造作に並べられているように見えた。

一見して、不安であった。円柱は直径、長短ともにさまざまなのだから、そこから安定感が生まれるべくもない。おまけに、切り口の角度がそれぞれ違った。あるものは神経繊維の尖端のように鋭角に尖り、あるものは眠たげにべっとりと平べったいまんまるの切り口を見せていた。そして、すべての切り口が、コンクリートのむき出しの地肌そのままだったから、粗くザラザラと乾ききっていた。

これが「絵」なのか。

いや、これのみでは十分でなかった。チャーレスの説くところに従えば、「絵」を完成させるためには人物が要った。試みに、その円柱群のまえに一人の人物を立たせて、十メートルほど後退しよう。そうすると、人物が「絵」の一部となって見える。と言うよりは、「絵」の不安の一部となって見える。ある円柱は彼を芋刺しにせんとし、ある円柱は大きく頭上におおいかぶさり、あるものは彼の横腹に記憶のように突出し、あるものは彼の股ぐらを、ていね

で存在するどころか、ふくれ上り、ふくれ上りして、その外側にまではみ出して行く。彼はもう今では円柱芸術はやめにして、絵具を巨大なキャンバスに、あるいは叩きつけ、あるいはうず高く盛り上げるようにして、ふつうの絵（とは言っても、いぜんとして、わけのわからないもの）を描いているのだが、すべてが、そのふくれ上り、はみ出しの所産であった。

「どうりで、あんたの絵はキャンバスからはみ出して、床を汚すんだね。」

私が言った。ボッブが大声で笑い、チャーレスは苦笑した。苦笑すると、頭髪の薄い彼も、少年のようにはにかんで見える。私はそんな彼を好んだ。

チャーレスと私が、この古ぼけたあばら家にひき移って来て共同生活を始めるのとほとんど同時に、チャーレスのアトリエにあてられた広間の床は、絵具のとばっちりで極彩色にきわめて華麗に汚れ始めた。これをもチャーレスは「美」であると主張するだろうか。ロイド眼鏡の奥で人なつっこい眼をしばたたかせながら。

大きな男ではなかったが（背丈は私より少し低かった。もっとも、私は日本人としては長身のほうで、たしかアメリカ人の平均身長より上であった）、骨格が太く、ぜんたいにガッシリしていて、力があった。実際、彼はよく力を

誇示したがった。これはアメリカ青年一般の病弊であるのかも知れない。《show the muscle》（筋肉を見せびらかす）という表現を、私はアメリカに来てはじめて知った。

この南部の小都会クレイトンには、ときどき市（フェア）が開かれ、近在からお百姓が集まって来た。お百姓といっても、日本の彼らを想像しては誤りであろう。みんな、もちろん、車で来た。キャデラックで来るのもいれば、自家用飛行機を駆って来たのだっているかも知れない。

ほかに娯楽のない田舎のことだ、市はたいへんな賑わいだった。日本の遊園地の博覧会に見本市を加えて二で割ったものと思えばよい。子供連れで来て、展示場をぶらつき、遊戯場のメリー・ゴー・ラウンド、電気自動車、木馬、その他もろもろの動くもの、動揺するもの、激動するものに乗り、またがり、立ち、パプコーン、アイスクリーム、コカコラ、ホットドッグ、ハンバーガーのたぐいを腹にぐいぐい押し込む。太陽は輝やき、汗は流れ、むやみに腹がへり、そして、喉がかわいた。

遊戯場の片隅に、その器械はあった。ばかに単純な器械である。柱が一本立ち、そのねもとにテコがあった。テコの一端を力自慢の男がハンマーで叩くと、鉄球が柱にそって昇る。一回がいくらだったか。力自慢はよくそれを試みる。彼はガール・フレンドに、見物の鼻タレ小僧たちに、頭上をカアカアと、たぶん「骨折り損のくたびれ儲け」と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

高らかに鳴いて過ぎるカラスたちに、いや、誰よりも自分自身に彼の「筋肉を見せびらかす」のであろう。柱の尖端まで鉄球が首尾よく達すると、そこに装着した鐘にぶちあたって、気持のよい音が鳴りひびいた。

柱には区分けがしてあった。上から順に——

よい腕だ／もうちょっと／かなりのでき／半分来たぞ／なまけ者め／弱腕居士／もっと豆を食べろ／お嬢さん／ミスター・霧／等々。——

器械のまわりには、かなりの人がいた。三、四人の力自慢を除けば、大半が子供だった。小さいのは鼻タレ小僧、大きなのは高校生らしい少年少女。女の子の喚声のなか、少年の羨望の視線のなか、鉄球が上下し、鐘がときどき鳴りひびく。私も見物人のなかに入って行った。

シャツを脱いで半裸になった男が、懸命に鐘を鳴らしているさなかだった。「たいしたものだぜ、これでもう八回なんだ。」そばのニキビ面の肥った少年が私にささやいた。汗が男のはだかの背中を流れ、そして、匂った。

それがチャーレスであった。彼は私を認めると、いかにも一仕事終えたというような明るい表情で笑った。

「来ていたのかい、サキ。ちっとも知らなかった。ずっと見ていたのかい？」

「いや、残念ながら、いま来たばかりだ。」

見物人たちがいっせいに私を見た。その視線は、はじめに驚愕、ついで好奇のそれに変る。チャーレスという彼らの力の英雄へラクレースと、私という東洋の異邦人とのあいだに、いかなる関係があるのか、あり得るのか——彼らの視線はそれを追い求めていたのだろう。さっきのニキビ面の肥った少年までが呆れはてたように私をみつめているのを見ると、私にささやいたときには、私が何ものであるか、まだ認めていなかったのだろう。それほど、彼はヘラクレースの美技に酔っていたのにちがいない。「チャイニーズ？」「チャイナマン？」「ノー・ジャップ」、「ジャパニーズ」——ささやきが起った。私はそのすべてを無視した。私はもう、そうしたささやきには十分に馴れていたのである。

「誰がために鐘は鳴る》んだい？」

私は大声で呼びかけた。チャーレスは大きなタオルで無造作に体を拭いているところであった。彼とはそれまでに三度会ったきりだが、このふしぎな器械は、二人のあいだの垣根を一挙にとりはらい、おたがいをぐっと近づけた感があった。彼はゆっくりとアロハ・シャツを身につけ、身づくろいをすませてから、おもむろに答えた。

「自分自身のために、そして、ソビエト人民共和国のわが同志諸君に。とにかく、われら合衆国国民は、自由を護るために、常に強くある必要があるからね。」

高校生らしい少女が二、三人、甲高い声をあげて笑っ

た。ソバカス、ニキビ、それともう一つ、アメリカの高校生を特別に印象づけるものとして、濃くはいた口紅。それなりに、彼女らはかわいい。

「しかし、たぶん鐘はフルシチョフ氏のためにではなく、この女の子たちのために鳴ったのであろう。」

私はとぼけた口調で言った。彼は笑い、私の肩をどやしつけた。痛かった。たしかにここでも彼は、彼のヘクラレースであるゆえんを示したのである。

そのあと二人で歩いた。「お化け屋敷」のまえで彼が言った。

「日本にもこんなのがあるかい？」

「ある。」

射的のまえで彼が言った。

「日本にもこんなのがあるかい？」

「ある。」

綿菓子屋があった。アメリカにも綿菓子屋があるのだ。いや、あれも、もとはといえば輸入品なのか。綿菓子はいつも妙に私の郷愁をそそった。子供のときの縁日の記憶がよみがえって来るのだ。

「日本にもあれがある。」

私は妙に勢い込んで言った。チャーレスは、ふしぎそうに私を見た。

六十がらみの爺さんが売手だった。爺さんはゆっくり器械を操作する。みるみる、ふわふわしたものが、爺さんのもつ箸のまわりにまきついて行く。《*Cotton Candy*》という横文字を除けば、日本のとまったく同じだ。子供が四、五人、列をつくって待っている。口をあんぐり開いて、綿菓子という奇蹟の出現を待っている。

「子供はどこでも、みんな同じだ。」

私は言った。チャーレスはうなずく。

「食べるかい、われわれも。」

私は「イエス」と言おうとして、ふと、かぶりをふった。私はあることに気づいたのである。

「実際、子供はどこでも、みんな同じだね。」

チャーレスが同じことを言った。

「まあね。」

私は浮かぬ返事をした。

綿菓子屋の背後に柵があり、そこで市の敷地は終っていた。「子供はどこでも、みんな同じだ」ということばのとどく範囲は終っていたと言ってもよい。そこから先には、べつの一つの現実がひろがっていたのだから。

子供が六人、柵の外にぼんやりと立っていた。こちらを眺めている。にぶい視線だった。いちようににぶい——いや、私は、もうちょっとのところで、一人の少年の視線を見すごすところだった。

（何言ってやがるんだい）私には少年がそう言ったよう

に思えた。その視線がそう語っている。汚ない少年だった。ほかの五人が小ざっぱりとしているのに、彼だけはいやに垢じみたシャツを身にまとっている。貧しいというよりは、たぶん、少年には母親がなくて、それで、こんなにどことなく投げやりなのだろう。少年の頭の上には、強大でむき出しの父親の愛情だけがおおいかぶさっていて、彼を下から支えてくれるはずの優しい柔らかい母親の愛がない。未来の問題児だな——私は思った。十三歳。私は彼の年齢をそうふんだ。

柵ごしに私は少年を見、少年も明らかに私を見た。

「ジャップ。」

はっきり少年は言った。

さっきの見物人たちの「ジャップ」と、この少年の「ジャップ」のあいだには、微妙な差がある。すくなくとも、そのことばを言うときの表情には——私は直感的にそれを感じた。その差異が何を意味するのか、私には、そのあと、長いあいだ判らなかった。

「《ジャパニーズ》と言えよ。」

私は少年に言った。それはとがめだてではなく、一種の呼びかけであった。私はこんなふうにして、子供と大人の双方にわたって、友人、知己をつくった。

少年は答えなかった。表情をかえていた。いや、少年は表情をなくしたのだ。さっきの六人の少年のなかで彼だけ

には表情があったのだが、それが私のことばを契機として、一瞬のあいだに、他のみんなと同様のにぶい捉えどころのないものにかえられてしまっていた。もう、彼と他の五人とのあいだには、差異はなかった。六つの無表情が一つの壁となって、柵の外にあった。何十年も昔から、そこにそうやって動かずにあるように、確固と、そして同時にものうく、だらけた姿勢で存在していた。

「きみの名前は何というのだ。」

少年は答えなかった。私は問いをくり返した。

「リチャード。」

少年は一言答えた。

「苗字は？」

答えなかった。私は二度くり返した。ただ、沈黙が壁からはね返ってくる。

「おじさん、あんな奴らに訊ねるなよ。」

さっきのニキビ面の肥った少年が、いつのまにかそばへ来ていた。彼は、あれから、見えがくれに私とチャーレスのあとを追って来たのであろう。太い腰ではち切れそうになったズボンのポケットに両手を突っ込み、アゴで六人のほうをしゃくってみせた。

「*They are NIGGERS.*」（あいつらは《クロンボ》だぜ。）

私はうなずいた。と同時に、激しい羞恥が足先から急速に上昇して来るのを私は感じた。

「行こう。」だしぬけにチャーレスが言った。「話があるんだ。」
私たちは歩き出した。私はホッとした。
チャーレスの話というのは、それは耳よりな話であった。チャーレスの友人が今度北部へ帰る。友人は町外れに、めっぽう安い家を借りていた。平家だが、ぜんぶで四室ある。
「ただしボロ、それも幻想的にボロだよ。」
建ってもう三十年になる。たとえば、トイレットは棒で力いっぱいなぐりつけないと水が流れない。
「このあいだ、きみは寄宿者を出たいと言った。」
いっしょに住まないか、と言う。家賃を折半すれば、費用は寄宿舎と大差ない。
「とにかく、家だぜ。サキ、家だぜ。」
彼は歌うように叫んだ。私はうなずいた。
「ほかに誰か来るかい？」
「いや、きみだけだ。もちろん、きみが臨時的にガール・フレンドにベッドを提供するのに、おれは異議を申したてない。そういうことはおたがいさまだからね。」
私は、きまじめにうなずいた。
「とにかく、家なんだからな。」
「《ホーム・スイート・ホーム》かい。」
私は軽口を叩いた。それから、「わるくないな。いっしょに借りよう」と言った。
チャーレスは手をうってよろこんだ。こういうとき、西洋人の挙動は、気にさわるぐらい大げさだ。
「ワンダフル、ワンダフル！」
彼はくり返して言った。私は几帳面に、その「ワンダフル！」の一つ一つに、うなずいた。
興奮がしずまり、同時に市の出口までさしかかったとき、チャーレスはふと言った。
「奴らは美しいね、そうだろう。」
「誰が？」
「あの黒人の少年たちさ。」
北部人でインテリの彼は、むろん、《ニッガー》（クロンボ）というようなことばを使わなかった。《ニグロ》という、それよりは少しましなことばも用いなかった。彼は折目正しく、こういう場合のもっとも穏当な表現である《*colored*（色がついている）》ということばを使用した。
たしかに彼のような北部人のインテリは、そんなふうなことばを用いるのであろう。しかし、私は、何かそこに私に対する心づかいのようなものを感じた。
「そうだね……*Do you like them?*」
私はあいづちを打ち、それから、自分でも思いがけないことを訊ねた。*Do you like them?*——おまえさん、彼らが好きかい？　私は《*them*》に力を入れた。無意識的にそ

うしていた。彼ら――少年たちのことであり、少年たちにかぎられたことではなかった。つまり、色がついている彼ら。――

「おれは美しいものが好きなんだ。」

チャーレスはくったくのない表情と声で答えた。彼が私の問いの意味を理解していないことは明らかだった。突然、私は激しい焦躁を感じた。距離があり、その距離ははじめから零であるがゆえに越えられない距離なのだ。

「そうか、きみは美しいものが好きか。」

「イエス。」

チャーレスは言い、そして、歩いた。私も歩いた。

2

チャーレスは北部人（ヤンキー）だった。ニュー・イングランドの田舎町で生まれ、エール大学の美術学部を出た。兵役をすませたあと、パリへ行った。

パリには二年半いた。金はどうしたんだと訊くと――

「いつか面白い漫画を見たことがあるよ。シャンゼリゼの喫茶店で、アメリカ人が四、五人集まって話をしているんだね。一人が言う。『おれはフォードで来ている。』他のやつが言う。『おれはロックフェラーで来ている。』もう一人が『ぼくはフルブライトで来ている。』……判るかい、この連中は、みんな、フォード財団やらロックフェラー財団やらフルブライト留学生プログラムから、お金をもらって来ているというわけなんだな。これは今日のアメリカの流行だよ。みんながそう言う。すると、見すぼらしいふうていをしたのが、横から口を出すんだ。『おれはおれ自身で来ているんだ』ってね。」

チャーレスは口をすぼめて、皮肉に笑った。

「あんたはどうなんだい。あんたはあんた自身でパリへ行ったのかい。」

彼はうなずいた。

「いろんなことやったよ。会話の先生、ボーイ、似顔絵描き、英字新聞の立ち売り、ジゴロ、無為徒食……」

「何故、パリへなど行ったんだ。あんたの傑作《人間・このまるはだかなるもの》を作るためかい。」

「なに、流行だよ。アメリカ人は、すべて成年に達すると、ヨーロッパへ行かなければならないと考える。何故そんなふうに考えるか、これは世紀の謎だね。きみ、知っているかい、アメリカの若者がパリへ着くと、まず何をするか。」

「エッフェル塔へでも昇るのかい。」

「それはお上りさんのやることだよ。観光バスにつめこまれて、右はセーヌ河、左は凱旋門、オー・ワンダフル、スプレンディッドー　と叫ぶ善男善女のやることさ。お上りさんでない連中は……」

「すくなくとも、自分でそうでないと信じている連中は……」

「皮肉を言うなよ。とにかく、そういう連中は、パリに着くとすぐ本屋へ駆けつける。そこで、パリで発行されてアメリカやイギリスでは発禁になっている《不潔な本》を買いあさる。たとえば、ヘンリー・ミラーだ。このあいだ、きみが読んでいたのだって、あれはおれがパリから密輸入して来たものなんだ。わかるかい、おれの言う意味が……アメリカってところには、まだまだ、そんなところがあるんだな。」

ヘンリー・ミラーといっしょに、彼は、脳細胞のなかにいろいろなものをぶちこんで帰って来たのだろう。アメリカに戻るとすぐ、ニューヨークのスラム街に居を定めた。種々雑多な職業を転々とした。最初はよかった。あるカレッジで絵を教えたのである。ふた月でクビになった。教頭と喧嘩したのである。トラックの運転手になった。レストランの給仕になった。西部物専門の出版社にやとわれ、彼の表現を借りれば、「ピストルと保安官とインディアンに明け暮れした」こともあった。日本で言うなら、チリンチリンのゴミ屋さんにもなった。(ただし、アメリカのゴミ屋さんはチリンチリンなどという風流なことは一切しない。夜半、うしみつどき、突如としてゴミ屋をのっけた巨大な自動車が現われ、轟然とすべてを持ち去る。つまり俳句と叙事詩の差であろう。)

ある画廊で開いた個展が運のつき初めであった。ニューヨーク・タイムズがかなりよい批評を書いた。もっとも、記者が隣りの画廊へまちがって入ったからだという説もある。これは、チャーレス・ハーバート・ローガン氏の説だった。

絵が売れた。いろんな経費を引くと、三〇〇ドルが手もとに残った。彼は旅行に出た。南部へである。それが、彼のかねてからの懸案であった。

ある町に来ると(その町名をきくと、彼は「忘れた」と、しごく単純に答えた)、ここはウィリアム・フォークナア氏の居住するところであるという。彼は会ってみる気になった。

チャーレスは画家でありながら、あってもべつにかまわないわけだが、文学好きで、なかでもフォークナア氏は敬愛する作家であった。氏は文学青年などに会わないので有名な、あるいは、悪名高い作家である。こういう男に会うのこそ、面白いではないか。

町でぶらぶらしていると、フォークナア氏の知人だと称する男が現われた。散髪屋である。氏をよく知っているという。

「なにしろ、あの方はあっしの先生だったんでさあ。今でも、ロオタリ・クラブでおつきあい願っていますがね。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com